談話室

首都高の地下化

浅野 純次
（経済倶楽部理事長）

▼過日、久しぶりに国土交通省へ出かけて「首都高速の再生に関する有識者会議」を傍聴してきました。この会議は首都高を全面的に地下化して渋滞、排ガス、景観、それに老朽化対策を一挙に解決できないかという問題意識のもと4月から始まったもので、7月に4回目の会議を開いて提言取りまとめに入る予定です。

▼委員は、座長の政治評論家・三宅久之氏をはじめ、大学教授、経営者団体幹部、それにロータリークラブの仲間である木村眞さん、作家の猪瀬直樹氏、ファッションデザイナーのコシノジュンコ氏など12人。国交省の前から六本木に向かって延びる首都高が「醜悪だ」と主張するコシノさんに、「建設当時はモダニズムの象徴としてあれは評価に耐えるものだったのだ」と猪瀬流の反論があったりしましたが、地下化に真っ向否定的な意見は聞かれませんでした。もちろん今後、コストと効果と資金をめぐって議論はもめるでしょう。

▼ところで首都高の地下化を最初に言い出したのは、私の属する日本橋ロータリーなど地元の人々でした。東京の（つまり日本の）顔、日本橋の上を片道2車線の高速道がすっぽり覆っている現状はあまりに重苦しく、観光客に対しても恥だとして、10年ほど前、これを除去する日本橋再生プロジェクトを立ち上げたのです。当時の小泉首相、扇国交相、石原都知事など別々にですが橋の上に立ち、取り除くために努力すると異口同音に語ったので地元は一挙に奮い立ちましたが、日本橋周辺だけを地下化するに数千億円という工事費はあまりに重く、熱気が冷めかかっていました。

▼ところが杉並ロータリーなどが熱心に景観（環境）面などから地下化の構想を温め、国交省との何回もの勉強会（私も出席していたのですが）を通じて煮詰めていったところ、国交省幹部もがぜん本気になってきました。特に首都直下型の大震災には老朽化した首都高ではもたないことが懸念されるようになって、追い風が吹き始めたのです。東京オリンピック誘致に成功しても、首都高があちこちで崩落などとあっては世界に恥をさらすことになる。NHKの特別番組「橋が危ない」は誇張でもなんでもないのです。

▼地下化といっても地下50～90メートルという大深度に道路を通すことで、用地買収はクリアできます。大深度だと地震の揺れもほとんどありません。今の土木工事のレベルは大変なもので、東京オリンピックに間に合わせることもできない相談ではないとか。問題は4兆円とも言われる総事業費ですが、PPP（官民連携）やPFI（民間資金活用）などで財政に頼らず資金を集めることもできなくはなさそうです。

▼今さら土木工事なんてという批判もあるでしょうが、これには環境を改善し都市を美しく快適にする、街の安全度を高める、という重要な狙いがあります。東洋経済ビルの目の前を流れる日本橋川は隅田川合流部から全長5キロ、その95％が首都高で覆われている汚い川ですが、これが青空と太陽と風を取り戻せば魚の泳ぐ川を船で行き来する観光資源に一変するでしょう。

▼ソウルでは老朽化した高速道路を取り払いその下に眠っていた清渓川（チョンゲチョン）を復活させて水辺空間を市民の憩いの場としました。ボストンでも大渋滞で都心を分断していた高速道路を撤去して地下化し地上は緑化地帯に変貌させています。私が東洋経済に入って間もなく3階の職場の前に忽然と高速道が建設され、八重洲方面の眺めは振動と騒音とともに消え失せました。あれからほぼ半世紀、高架の首都高（低速道ですが）が役目を終え東京が魅力ある街に一変する日が待たれます。